

引用と非引用

——大山祇神社法楽連歌の場合——

はじめに

「文学の言葉」はひとつの点（固定した意味）ではなくて、いくつものテキストの表面の交錯、いくつもの文章が、すなわち作家、受け手（すなわち登場人物）、当時のあるいは先行する文化のコンテキストが交す対話となる。」

「どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にはかならないという発見である。」(Julia Kristeva 『Σημειωτική——Recherches pour une sémanalyse』原田邦夫訳『記号の解体学——セメイオチケー』せりか書房、一九八三年)

ここでは（文学）テキストは単に固定した意味を担う静的な存

今野真 二

在ではなく、「引用のモザイク」と考えられ、また意味の多重性をもつ「多声的」なものと考えられている。クリステヴァはテキストのこのような性質を「テキスト相互関連性」(inter-textualité)とよび、そうしたいわば無限の引用によって成り立っているテキストを「相互関連テキスト」(inter-texte)とよぶ。この概念における《引用》とは出自の明確さはまったく問題にしない。

本稿は大山祇神社法楽連歌（以下単に法楽連歌と称す）を上記のごとき「引用」と「非引用」という二つの（しかしながら相即的な）視点によって考えた。クリステヴァの《引用》が無限であるのに対し、本稿では、文学世界に出自を求め得たもの、または求め得る可能性のあるものに限って「引用」と考え、それ以外を「非引用」とした。したがって本稿で「非引用」と考えたものも、将来考究が進むにしたがって「引用」となる可能性もあると考えられる。

連歌が本歌・本説によって先行する文学を背景としてとり込む

ことによって多重性をもつことを志向している以上、こうした留保付の「引用」を分析の軸としてとり入れることはむしろ当然といえる。また分析の理論は対象となるテキストを効果的に浮き彫りにするために、ずらされ、改変されなければならないこともいうまでもない。

「一 詞ハ花のなかに花をたつね玉の中に玉をもとむへし……（中略）おほ／かたは代々勅撰のこと葉をいつからすといへともあた／らしくいたしたらんも又俗なる詞も連歌にハ／くるしみあるへからす但一向物もしらぬ輩ハ俗に混し／てきたなき事をする也それをハことに斟酌すへし凡／ハ心ひと付て秀逸になりぬれハ少々ハことハのあ／しきもあなかに難にきこえず」（二条良基『連理秘抄』⁽²⁾）

これは『連理秘抄』の一節である。ここでは連歌で使われる詞に対する二条良基の考えが述べられている。つまり、「代々勅撰のこと葉」を中心にして「あたらしくいたしたらん（詞）」・「俗なる詞」をも合わせて用いる、ということになるが、それは連歌に使われる詞の特色を端的に表現している。「代々勅撰のこと葉」とは「勅撰集の語彙」であり、いわば歌語として位置づけることができる。「あたらしくいたしたらん（詞）」の部分は、この『連理秘抄』の草稿本とされる『僻連抄』⁽⁵⁾では「あたらしくいたしたらむ」とある。ここでいう「あたらしくいたしたらん」・「あたらしくいたしたらむ」は、「代々勅撰のこと葉」という文

学の伝統に対しての「あたらし」さと考えるべきかと思われる。

それはより具体的には、自由な発想に基く、語の複合として実現されるのではなからうか。歌語に代表される世界を今、一般的に和歌世界と考えれば、「あたらしくいたしたらん」は、和歌の伝統に則っていないという点で非和歌世界のものと考えることができる。連歌はこうした、和歌世界と非和歌世界という両面性を備えて成立している。そしてまた、論題に即して「引用」という点からこの二つの世界を考えれば、和歌世界Ⅱ（文学伝統の）「引用」、非和歌世界Ⅱ「非引用」という図式が成立しよう。

すでに連歌語彙については専論がいくつか公にされているが、本稿では前述の様に、法楽連歌の語彙の特色を、その出自に着目し、「引用」・「非引用」という視点に基き、若干の語の考察を通して分析していくものである。そしてまた、かかる分析によって得た結果は自ら、連歌語彙の特色の考察に通じるものと考えている。

一、法楽連歌の本歌・本説

先に引用した二条良基『連理秘抄』中にも本歌・本説に関しての規定がみえる様に、いわゆる本歌取りや、詩・物語・故事等の詞からの取材は連歌においては一般のことであった。本歌については論書によって規定がことなるが、たとえば『連理秘抄』では「堀河院百首の作者まで」としている。また物語としては『伊勢物語』・『源氏物語』が重視されていた。⁽⁸⁾次に法楽連歌にみられる

本歌・本説による付合をいくつかあげる。

(i) 本歌

①「雁音も我方／とてや急くらん　しほかなひぬと／ふねもゆくなり」上1初オ六　付句は額田王「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」(『万葉集』8)をふまえていよう。

②「故郷の野に澤／ちかき鴨立て　ものゝあはれの／ゆふ暮の秋」上2ニウ七・八　付句は西行「心なき身にもあはれはしられけり鴨立つ澤の秋の夕暮」(『新古今和歌集』362)によっていよう。③

「別路のやするふ／ひまに夜ハ明て　みねにたなひく／よこ雲の空」上92三ウ十一・十二　④「見そあかぬ夢の／うきハしたえ／／にミねにわかるゝ／今朝の横雲」上132三ウ十一・十二の付句、④の前句と付句は藤原定家の「春の夜の夢の浮橋とだえして嶺にわかるゝよこ雲のそら」(『新古今和歌集』38)によっていることが一見してあきらかである。⑤「月かけのさすや／三笠のうちかすミ　ふりさけ見れハ／雲のたえ／／」は安倍仲磨「あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも」(『古今和歌集』406)によっていると思われる。本歌の範囲は举例からあきらかな様に、規定通り「勅撰集」を中心とし、それに『万葉集』を加えたものと考えられる。しかし、やや特殊な本歌を予想させる例が若干存在する。⑥「浪そ花さくとハ／見えぬ桜川　木のかもの／かすむつくはね」上11三オ十三・十四(*「木のかもの」は「このかのも(此面彼面)」の借字表記。法楽連歌にはこの様な借字表記が多い。)この付句は、『風俗歌』(常陸)「筑波嶺の　此の面彼の面

に　蔭はあれど　や　君が御蔭に増す蔭も　増す蔭もなしや」の初・二句と酷似している。⑦「石上ふる野あす／かはほと遠し河は見えぬに／しるき高ハし」上6二オ七・八は、「石上ふる野」と「高ハし」との結びつきが、「石の上　布留を過ぎて　薦枕　高橋過ぎ　物多に　大宅過ぎ……」という『日本書紀』(武烈天皇)歌謡94を思わせる。⑧⑦二例の場合は法楽連歌の連衆が、直接それらのテクストにふれていたとも、また本歌取りを思わせる様な語と語の結びつきが寄合集などに収載され、その様な手引書にしたがったものとも考えられる。しかし、いずれにしても寄合集等に収載される時点で連歌はこれらのテクストにふれたことになる。連歌と、それに先行する古典文学とのふれあいのひろがりの可能性を示す例としてこれら二例を掲出した。

ii) 本説——本説としては物語・故事・諺の例をあげることにする。物語としては『伊勢物語』・『源氏物語』が顕著である。⑧「我がたへ文／ことつくるうつ山　やすらひニけり／つたの下道」上11二オ三・四　⑨「都のつてハ／きくもなつかし　宇津の山うつミニ／きつミ夢の中」上79初ウハ・九　⑩⑨二例は共に『伊勢物語』第九段に取材していることがあきらかである。⑩「さためけり女の／しなのさま／／ニ　あま夜の月ハ／入もしられす」上15三オ七・八

⑪「うつせみの其ひと／からをしたひつミ　軒はの萩の／うちしける比」上13三ウ五・六　⑫は『源氏物語』帚木巻のいわゆる「雨夜の品定め」に取材し、また⑫では「うつせミ(空蟬)」・「軒はの萩」という『源氏物語』の登場人物(母娘)の名前が詠みこまれてい

る。またこれら以外に前稿で指摘した例もある。さらに、たとえば⑫「とこやミヤ岩戸／明けしニ晴ぬらん ひかたの鐘く／もりなき影」上20名オ三・四は記紀に取材したものと考えられる。⑬「浦嶋か其名も／いまは遠代に はこのたからそ／君につたふる おろちをの剣や／四方をおさむらん」上15三ウ三・四・五 まず五句は記紀の草薙の剣に拠ったと思われる。「おろちをの剣」は、あまりみられない表現であるが、いわゆる「やまたのをろち」を速須佐男命が退治した際に尾から現われた剣をさしていると考えられる。また三、四句はあきらかに浦嶋伝説をふまえている。⑭「山人のすみかハ／こゝと物古て たつねてとへん／くすりある嶋」上44名オ七・八 ⑮「いく薬をも／もとめてしかな 名のミ聞よもきか／しまへいさしらす」下14三ウ八・九「山人」はここでは山人(やまびと)のことではなく、たとえば「Yamabito 山林で薪を切る人。またシナの山林や人里離れた所に隠れ住んでいて、不思議な事を行なうと思われている人々」(『日葡辞書』)の「また」以下の解釈にしたがうのが順当であろう。この、仙人の義の「山人」は『節用集』諸本にもみえず、また『運歩色葉集』(静嘉堂文庫本・天正十七年本)・『温故知新書』・『頓要集』等の中世古辞書類にもみえない。しかし宗碩『藻塩草』卷十四には「やま入 ○仙人のおる袖にはふ菊とよ代(の石の床霞に花は猶にはひつゝ)」(七ウ)とある。例歌としてあげられている前者は、「山人のをる袖にはふ菊の露打はらふにもちよはへぬへし」(『新古今和歌集』719)、後者は『万木和歌集』¹⁸⁷にもみえる藤原定家の歌である。前者は「ちよはへぬへし」とあるところから、また

後者は「石の床」・「霞」などとあるところから、いずれも仙人の義の「山人」と考えられる。また里村紹巴『匠材集』⁽¹⁹⁾では「や」部第一条に「やまびと 仙人なり」とみえる。『日葡辞書』が中世古辞書類ではなく、『藻塩草』・『匠材集』といった連歌辞書と共通する解釈を掲載していることはそれ自体興味深い事実を示していると思われるが、ここではそれを指摘するにとどめる。「山人」と仙人の結びつきは以上の諸書の例によって裏付けられたと思う。そして仙人と「くすりある嶋」との結びつきは、『長恨歌』において、方士が死んだ楊貴妃を求めて仙山に到る一節を連想させる。「よもきかしま」は、「蓬来山(島)」の和語的な表現——いわゆる拠字造語——と思われる。「いく薬」は「生薬」(不老不死の薬)であり、「君がためよもきがしまよりぬべしいくすり」とるすみよしの浦(藤原家隆・住吉社卅首)の様に、「よもきかしま」との結びつきは和歌にもみられる。これらから、⑭⑮は共に『長恨歌』に拠ったものと考えたことにした。

また次の句は「綸言如汗」に拠ったものと考えられる。⑯「身よりいてたる／あせハかゑらす たれとてもちよく／にをそれぬ人ハなし」上27三オ九・十

以上、法衆連歌における、本歌・本説によると思われる句をあげた。法衆連歌が、連歌学書の規定にもれず、先行する和歌・物語・詩・故事を「引用」して成立していることを示し得たと思う。次には、法衆連歌が本歌・本説によって代表される伝統的な文学世界と結びついていることを若干の語の分析を通して考えてみる。

二、「竹姫」・「さねこん」・「やふしかくれ」をめぐって

(i) 「竹姫」

①⑦「鶯のす守貝子／をうみすてゝ その竹ひめや／代かたりの春」^{上30二ウ七・ハ}この「竹ひめ」は寄合を示している箇所では「卯子ニ竹姫」^{上59第三寄合}と漢字表記されている。この付合が『竹取物語』に取材したものと考えることが許されるならば、「竹姫」はかぐや姫をさしていると考えられることになる。そして、この「竹姫」^①かぐや姫という解釈を支援する例を、連歌書にみいだすことができた。

「しはしこそ人にましはれかくや姫／あへの市路へふしの川かミ／この付やうハかくや姫あへの市に立たりと見ゆ竹姫を市／めになし侍らん事いたはしくや是を当時ならば／月のなかにはうつる秋の夜などやしかるへ／く侍らむ一句ハ秋のようつりきて月のなかハになるこゝろ／也前による時ハ竹姫もとは月宮の天人なるかしハし下／界にくたりて作竹の翁に養しかともつゐに八月十／五夜月宮に返し事にや成侍らむ」(『老のすさみ』⁽²²⁾五〇一ウ)

ここではあきらかに「かくや姫」^②「竹姫」としている。また『匠材集』にも「たけひめ かくや姫也月／の宮の天人也」とみえる。これらの二例から、「竹姫」がかぐや姫の義であることはあきらかだが、いまだ通行の国語辞書はこの語を掲出しない。よって「竹姫」なる語がどの程度、またどの様な世界で用いられたかについても、にわかには推しがたいものがある。しかし、筆者

の得た連歌書の例からはかれは、すくなくとも連歌世界には「竹姫」なる語がかぐや姫と同義で用いられていたことがあきらかである。「竹姫」という、いわば特殊な語が法楽連歌にみられることは、その背景に『匠材集』の如き連歌辞書にもとづく、連歌あるいは和歌の伝統世界の摂取といったことを予見させる。仮に「竹姫」が種々の資料に一般的にみられる語であれば、もちろんこうした推定は成立し得ない。しかし「竹姫」が特殊な語であるからこそ、背景(Ⅱ「抛りどころ」)となる世界の存在を想定し得ると思える。

(ii) 「さねこん」

①⑧「行人にさねこん／いつといひかハし 柳をおれる／袖はしるしも」^{上11名オ三・四} ①⑨「秋はたゝさねこん／旅のわかれかも月にちきりをふかくむすひて」^{下68三オ七・ハ} ②⑩「白鶯の独り□／すむや朝日影 秋ハさねこん／帰る雁金」^{下88三ウ十三・十四}「さね」はすべて「来む」と結びついて用いられている。「きっと。必ず」の意の副詞と考えられる。この「さねこん」も『匠材集』に掲出されている。「さねこん まことにこん／也真来と書也」(巻四)これらはいずれも「さねこん」をあたかも複合語の様に結びつけて用いているが何か典拠があるのであろうか。ここで『源氏物語』をみると次の様な和歌がみいだされる。「ゆきてみてあすもさね。来ん中／にをちかた人は心おくと」(薄雲)「さねこん」の淵源はこの『源氏物語』にあるのではなからうか。連歌において『源氏物語』が重要視されていたことは前述した。その様

に重視されていた『源氏物語』中の和歌の用語がそのまま連歌世界にうけ入れられたと考えてもさして無理はない。『藻塩草』も

『匠材集』と同様の記述をみせる。「さねこん はやくこむとなりまこ
とにこむ共云り／実来

けり」(巻十六)『源氏物語』の註釈書も同様の解釈をしめしている。「一 サネコム 実来ト書マコトニコン也」(『源氏物語千鳥抄』(四十一オ)この様に註釈書にとりあげられ註釈を施されるとい

うことが繰り返されることによってある語が特別な意味合をもつ

——たとえば歌語として——ということとは充分考えられる。「さねこん」もその可能性をもつ語としてあげたい。

(iii) 「やふしかくれ」

②「住あらずやふし／かくれの庵ふりて 草ふかゝりき／庭のやり水」下出名オ九・十 この「やふしかくれ」はやはり『匠材集』

に「やふし隠 物しけき陰也／しハ置字なり」として掲出されている。「し」は『匠材集』の解釈の様に、強意の間投助詞と考

えるのが妥当であろう。「やふかくれ」は和歌においても用いられているが、「やふしかくれ」は語の結びつきとして特殊である。

その様に特殊な連結をした語が、一方では連歌辞書に掲載され、もう一方では地方連歌の実作にみられた場合、(ただちに直接的

なつながりを求めることはもちろんできないものの)両者の間にその背景となる世界の共通性を考えることはあながち無理なこと

ではあるまい。

これら三語以外にも『匠材集』が語義解釈に対して示唆を与えてくれた例がある。それらはつまり、『匠材集』に代表される連

歌辞書が吸収してきた連歌世界、さらには和歌世界(敷衍すれば伝統的な文学世界)と、法楽連歌の結びつきを示していると考えられる。論題に即して言えば、以上が法楽連歌における「引用」であり、前半は「本歌・本説」を中心として、後半は「竹姫」・「さねこん」・「やふしかくれ」という特徴的な三語によってそれをしめた。

三、あたらししくいたしたらん詞

いかなる基準によって「あたらししくいたしたらん(詞)」をとらえるかが問題である。前述の様に「あたらし」さは、あくまで文学伝統に対するそれであり、「あたらししくいたしたらん(詞)」は新奇な造語としてではなく、語の複合においての自由さとしてとらえるべきであろう。その「自由さ」を考える客観的な条件として、ここでは次の二条件を便宜上考えた。①まとまった言語量をそなえ、室町時代語の拠りどころのひとつである「日葡辞書」そして②連歌辞書である『匠材集』の二書に掲載されないこと。ただし『匠材集』における見出し語数は決して十分なものとはいえない。また、①②の二条件が絶対でないことはもちろんであり、故に「便宜上」とした。以下にはこれらの二条件を満足させる語の中で、比較的耳なれない若干の語を次に掲げる。

(ただし、語義・語形等に問題があると認めた語は、一括して後に掲げた。)掲出はおおむね五十音順としたが語構成などで関連のある語は一括してあつかったものもある。

(イ)「秋みせかほ」・「故しりかほ」

②「若葉もて秋／みせかほの楓哉」上86初オ発句 ③「百千鳥故しり／かほの啼音にて かけさす野への／日そうらゝなる」上10三ウ三・四「故しりかほ」は語構成上もあまりみみなれないとはいえず、むしろ通行の国語辞書がこの語を掲出ししないことは疑問である。「秋みせかほ」は「秋であることを知らせる様な顔」ということになるうか。楓は若葉から赤いのでまるで紅葉の秋を思わせるという句意であらう。

(ロ)「いろこつゝし」

④「きえなくも常の／灯かきたてゝ いろこつゝしそ／けにさかりなる」上21初ウ十二・十二「いろこつゝし」がある種のつゝじの別称という可能性もなくはないが、「常の灯」と「けにさかりなる」の関係から「いろこ」はやはり「色濃」と考えるべきであらう。

(ハ)「殊むし」

⑤「かれのゝ夕／秋ものこれる 殊むしハミな声も／なしきり／くす」上11三オ六・七（*「も」の右横に「そ」が傍書されている）「殊」は「異」の異表記か。他の虫が鳴かなくなつてからもきり／くす」が鳴いているという句意か。

(ニ)「さとあひ」

⑥「聞度に遠さかり／ぬるむしのこゑ あらし寒けき／やまのさとあひ」下72三オ九・十「さとあひ」は里間と考えられる。里と里との間、山などに散在する里々の様子を表現した語と思われる。

(ホ)「新つれ」

⑦「あひ見てはなにと／ことはをかわすへき はつかしけにも／むかふ新つれ ふたりぬる夜床ニ／火をやとほすらん」上15三オ九・十一前句の句意、さらには付句の「ふたりぬる夜床」から判断して、新婚の夫婦の意かと考えられる。

(ヘ)「袋弓」

「琴ニ袋弓」上61第七寄合 法楽連歌では長祿三年十二月の千句について寄合の詞を掲出したものが添えられている。そこでは、たとえば⑧「山ハかすみてい／つるたきをと 風に今日をき／漕舟もなちの浦」上28名オ十二・十三 については「なちニ瀧」とある。

この「琴ニ袋弓」に対応する句は、⑨「ふるき多ひらそ／とこに見えける 國おさむ弓を／袋に入おきて」上43三ウ十三・十四と考えられる。ここでは直接「袋弓」という語は用いられていない。しかし寄合の掲出方法をみると、たとえば「ひむろニ御調」・「松風の里ニまな鶴」・「錦ニ古郷」・「雲林ニかとて」などの様に掲出されているのはひとつの（連合した）語である。したがって、「琴ニ袋・弓」とは解し得ない。語の意味はもちろん「袋に入った弓」であらう。

(ト)「舟枕」

⑩「今夜又しらぬ／塩路の舟枕。うきこゝろにハ／なにかしくへき」上23三ウ初・二「舟枕」は、船中で旅泊する「波枕」と同義で、舟を枕にしてすごす状態をさしていると思われる。

(チ)「みやこかたり」

㉑「おもふまゝ今日も／友ある旅に来て ミヤこかたりそ／たれもうれしき」上1初オ七・八 ㉒「友を得て都／語ニ日をくらし／野分ハすまの／つらき音信」上28名オ初二 これらの例から考えて、「都語」は、単に都のことを語るのではなく、自分が都にいた時のことを語ることであると思われる。自分と密接に結びついていた都のことを、あるいは旅の途次で、あるいは都から遠くはなれた土地で（人と）話し合うのが「都語」だと思われる。㉓は『源氏物語』の須磨・明石の巻を思わせる。都から須磨に流されてきた光源氏が、そこで都のことを人と語り合った時、それが「都語」になろう。

(1)「もろたけ」

㉔「これわととへハ／金^(こがね)はるやま もろたけの子なれ／は親をはこくみて」上46二オ六・七 「もろたけ」は諸丈と考えた。親と同じくらしいの背丈になって成長した子が親を養っている、という句意であろう。

(2)「やふうさき」

㉕「法をはなとや／みゝにふれさる 月はかりたふ／とくおもふうさき」上136三オ四・五 前句「みゝ(耳)」に対して「やふうさき」をつけたものと思う。「やふうくひす」・「やふすすめ」・「やふねすみ」等と同等の語構成であるが「やふうさき」はいかにも新奇である。

以上はとくに語形として耳なれないものを取りあげた。これら以外で前述の条件をみたす語として次の様なものがある。(1)「あ

ら磯きわ」上57初ウー (1)「いたかきね(板垣ね)」上133名ウ二 (1)「いてしは(出機)」上31三オ四 (1)「いはね水(岩根水)」上168初ウ十三・下81名ウ七 (1)「大宮守」上36名ウー (1)「かた儀員」上23三オ十三 (1)「かたわれ貝」下102三ウ九 (1)「菊紅葉」下41三オ三 (1)「小花」上157二オ六 (1)「小弓あそひ」下30三ウー (1)「さゝのくり(小栗)」下104初ウー (1)「さといて(里出)」上11三ウ三 (1)「しほれば(菱穂)」上2二オ五 (1)「すゝめいる鳥」下151三オ二 (1)「関鳥」下88三オ三 (1)「たのつり人」上51三オ六 (1)「千町田」^(ちまちだ)下153初オ七 (1)「對馬つたひ」上91二オ十三 (1)「ともなしを舟」上74三ウ三 (1)「なか五月雨」上43三オ十四 (1)「夏萩」上96三オ八 (1)「なみたれころも」上185名ウ四 (1)「にわ野(庭野)」上112三ウ十三 (1)「はつ小田」上22三オ八 (1)「はやしかくれ」下119三オ六 (1)「麓河」上110初オ初句 (1)「ふるさわ水」下62初ウ十一 (1)「古軒」上98初ウ七 (1)「みたれね(乱寝)」上117二オ四 (1)「みちのくかね」上89名ウ六 (1)「もみち原」上25初ウ九 (1)「山さは(沢)」下148名オ八 (1)「尾上おろし」上87二ウ十一

以上が前述の条件をみたす主な語である。これらの語の性格を考えるために、前述の条件をさらに考えてみる。これらの語が現代通行の国語辞書に提出されないということ自体にはさほどの意味はないにしても『日葡辞書』・『匠材集』に掲出されないことは、次の様に考えられないだろうか。『日葡辞書』はかなり広範に室町時代語を収載している。にもかかわらず収載されなかった法楽連歌のこれらの語彙の性格をいかに考えるべきか。辞書は語の完全なる意味において総ばな主義をとることはできない。規模に差

はあつても重点主義をとらざるをえない。⁽²⁶⁾つまり前掲(イ)・(ロ)の法
楽連歌の語彙は、いわば『日葡辞書』の重点主義によつてふるい
落とされたか、またはもれたものと考えられよう。『匠材集』の
場合は、『日葡辞書』と比した場合、収載された語は客観的にみ
てきわめて少ないので、なお考察に充分とはいひがたい点もある
しかし、和歌・文学世界の伝統をふまえている連歌用語集に掲出
されないこれらの法楽連歌の語彙を考えた場合、あるいは和歌・
文学世界の伝統からはなれて存在する語彙ではないか、といった
予想は不可能ではあるまい。こう考えた場合、(i)『日葡辞書』の
重点主義からはずれ、(ii)和歌・文学世界の伝統からはなれている
という二点をかねそなえた語彙として、語の自由な複合による日
常的な語彙が考えられないだろうか。おそらく日常的に使用され
た語の大部分は文学作品などに使用されず、記録されることも少
なかつたであらう。そういった、いわば文獻外の語彙は(文学作
品にあまり使用されない故に)、現代通行の国語辞書に吸収され
得ず、現代の枠組みからすればあたらしいことになる。そして法
楽連歌の「非引用」としてあげたこれらの語は、やはり自由な結
びつきに基いて日常的に使われていた語と考えられよう。

最後にここでは、特に語義、語形が問題になる若干の語をとりあげてみよう。

(7)「梅坪」㊤「身にはをぬ空たき／ものゝ香を留て たかかさ
しかも／さける梅坪」下9名オ四通行の国語辞書では禁中五舎の一、
凝華舎の別称としての「梅壺」をあげるのみ。法楽連歌の前句か
らはとくに禁中を特定する様な表現はみられず、この場合、一般
的に「梅の咲いている中庭」と解すべきものと思われる。

(例)「みたれ碁」 ⑤⑦「つれ／＼も又／＼うちゆるふ比 くれしより」ともす／＼光のみたれ碁に あらそふ事の／＼いかはかりそも」上186名オ十三 ③⑧「うちあふほとも／＼ともへむつまじ あかすたゝこゝろを／＼うつすみたれ碁に きゆるをかゝく／＼とし火のもと」下98三ウ九 ③⑨「なをさえやらぬ／＼とし火のかけ あらそひにその／＼乱碁やしけからん」下182名オ九以上三句は「ともす光」・「ともし火」と共に「みたれ碁」が用いられている。さらに「みたれ碁」の例を連歌作品からみいだすことができた。「うちいて見れはよもそはるけき／みたれ碁の手まさる方の地へひろく」(「連歌延徳

抄』(九オ)さらに『新撰菟玖波集』(28)にもみえる。「石のうへにも世

をそいとへる／みたれ碁にわかいきしにのあるをみて」(巻十五 六十四ウ) 通行の国語辞書では「みたれ碁」に、中世の賭博の一種と

いったきわめて特殊な語釈を施しているものもあるが、掲出した諸例から推すれば、一般の碁において勝負の判定がにわかにつけ

がたい、混戦をさしていると考えられる。「ともし火」は、混戦ゆえ、日が暮れて暗くなってしまうことをあらわしていると思わ

れる。さらに『藻塩草』では、「碁」の条に「みたれこ らん

んこ」(前田本『枕草子』)、また「かいおほゐ、いしなとり、らん

んこなとやうのあそび事をも、つれ／ならすもてなさせ給」(四

一五)・「さており／につけて、かいおほい、ゝしなとり、こ、らんこ、すくろく」(二二・一三)『たまきはる』といった例にお

ける「らんこ」は、ある種の遊戯の名称であることを思わせ、

「みたれ碁」とはことなると思われるがいかなものであるだろうか。

ii) 注目すべき俚言形

(甲)「さや(賽)」④「雙六のさやに／あらそひよもあらし」上125

初ウ五 この「さや」についてはその存在が山内洋一郎氏によって指摘されている(註六参照)が、方言形として比定するにはいたっていない。武智正人氏『愛媛の方言』は、「サヤ」を方言語彙として掲出し、「原形又は意味」として「サイ、賽、双六のさい」

をあげる。そして「分布」として、三島、弓削島をあげる。とくに弓削島は大山祇神社の存する大三島に近い。もちろん『愛媛の方言』は現代方言を収集したものであるが、法楽連歌の「さや」を賽と考えることに無理はなからう。現代方言と語形を等しくするさやを室町期の国語資料に見出し得た貴重な例と考えたい。

(乙)「はゝゆし」④「梓弓やたけ／こゝろへあらはれて 向ふにすかた／はゝゆかりけり 曇なき鏡を／取もはつかしミ」上123ウ四 形容詞「はゝゆし」は例をみない。付句に「曇なき鏡」とあるところから「まばゆし」と類義かと考えられる。ここで方言形に着目すると、前掲『愛媛の方言』には、「まばゆい」意の「ババイ」が掲出されている。「分布」は周桑、今治、大島、伯方島など十七地点があげられている。法楽連歌の、この「はゝゆし」はこの「ばばいい」の古形が文献上に残ったきわめて貴重な例と考えて問題あるまい。「はゝゆし」→「ばばいい」という変化は、ちょうど「かはゆし」→「かわいい」という変化と対応するものであり、これも無理がない。

法楽連歌はこれらのごとき方言形がかいま見え、それゆえ貴重な国語資料と考えられる。また、この様に方言形を使用語彙に含んでいることは、前述の「非引用」にあたる語彙が、(方言形をも含んだ)日常使用語彙であるという筆者の考えを支援するものといえよう。

五、まとめ

以上法楽連歌の語彙を「引用」・「非引用」という二つの視点から調査した。その結果として、法楽連歌の語彙は「引用」を中心としながら、そこに「非引用」を織り混ぜて成立していることがあきらかになった。先述の様に、「非引用」としてとりあげた「あたらしくしいたしらん(詞)」は、現代人にとってのそれであり、法楽連歌の作者たちにとっては日常茶飯の語であったと考えられる。それらの語が日常的であればあるほど、辞書類にも掲出されにくく、また文学世界でも使用されにくかったと思われる。法楽連歌は(方言形も含めて)、そういったいわば記録されがたい語をうかがわせる点に、その国語資料としての大きな価値が存するものと考ええる。そして、そうした日常的な語彙を多く含むことが法楽連歌の特色といえる。本稿は法楽連歌の語彙を考察した。語彙の特色をいかにしてとらえるかについては種々の試みがなされている。しかし、語彙が語の集合である以上、集合を構成する個々の語に対する充分な考察が自ら求められることは言を俟たない。その点において重点主義または問題語主義ともいえる本稿の方法も必要かくべからざるものと考えている。

今回は、「引用」という視点によったが、たとえば「歌語」がいかにして成立し伝えられていくか、またその語義がどの様に変化していくかといった語彙史もきわめて興味深いものを含んでいる。今後は寄合集・賦物集をはじめ各種の連歌辞書などを含めた

語彙史のうえでの連歌語彙をも考究する所存である。

註(1)

大山祇神社法楽連歌については拙稿「大山祇神社法楽連歌のかなづかい」(『国文学研究』八十六集)参照。なお、調査対象は前稿と同じく、室町期の懷紙であることが明確なものに限った。

(2) 古典保存会複製『連理秘抄』によった。

(3) 「語彙」の定義は種々考えられるが、本稿では「ある条件にあてはまる語の集合」とする。

(4) 「歌語」の定義も種々聞えられるが、本稿は、桜井光昭「歌語の性格」古今和歌集を中心に——(『国文学研究』七十六集)の定義にしたがって和歌文体に用いられる言語とする。ただし本稿では和歌世界と(女流)文学世界を、伝統的であるという点で「引用」の世界ととらえる立場をとる。したがって本稿における歌語は、「広義の歌語」つまり、「和歌文体の文章に用いられる、すべての言語」である。

(5) 『連歌貴重文献集成』第一集所収の長谷寺藏本によった。

(6) 山内洋一郎「国語史より見た大山祇神社連歌」(『愛媛国文研究』二十七号)、同「連歌語彙の構造——千句六種による計量的分析——」(『連歌と中世文芸』角川書店、昭和五十二年)、同「連歌語彙について——千句連歌と句集との相違をめぐって——」(『国語語彙史の研究 一』和泉書院、昭和五十五年)、佐藤宜男「和歌・連歌の語彙」(講座日本語の語彙 四『世界の語彙』明治書院、昭和五十六年)。

(7) 「へ本哥 一首三句にわたるへからす遊哥あらハ付へし／件のにけうたさきの哥をとりたる後代／の哥にてあらハ不可用又新古今以来の作／者本哥にたらず堀河院百首の作者まで／とる也證哥にハ近代の哥も子細なし古作者／は近代の勅撰の哥をもとるへし／へ本説 大略本哥におなし三

句に及へからず詩／の心物かたり又俗にいひつけたる事もよ／りあひにへなる也」(『連理秘抄』²⁰オウ)

- (8) たとえば『連理秘抄』では、連歌の心得について次の様に述べる。「只堪能に練習して座功を／つむより外の稽古ハあるへからずそのうへに三代集／源氏の物語伊勢物かたり名所の哥枕かやうのたく／ひを披見して有興さまにとりなすへし」(4オ) また源氏国名百韻・伊勢物語詞百韻・源氏物語詞百韻といった物名連歌もおこなわれていた。

- (9) 本稿は、『變緩』^{變緩}古典叢刊三・四として影印刊行されている懷紙をテキストとした。叢刊三・四を各々上冊、下冊と考え、「上1初オ五・六」で上冊一頁初折表五句・六句を表わすことにする。

- (10) 以下、特にことわらない場合は岩波書店刊古典文学大系をテキストにした。(版刷の別は本稿では問題ではないので特になげない。)

- (11) 正姿は「やすらふ」で開合の違例にあたる。法楽連歌の開合の表記については前掲拙稿を参照。

- (12) 『万葉集』も連歌ではとり入れられていた。「此此ハ万葉ハやりて侍り／まことに哥の根源にてあれ／よく／御覧すへきにや」(『筑波物語』²⁹オ) (『連歌貴重文献集成』第一集所収の内閣文庫本によった。)

- (13) 「其外日本記風土／記ハ国の名所のおこりなとかきたる／物なれハふかく稽古あらん人ハ御覧すへきにこそ」(『筑波物語』²⁹オ)

- (14) 前掲拙稿参照。

- (15) 『梵灯庵袖下集』には「ひかたの鏡」という記述がみえ、おそらく「鐘」は誤記と思われる。

- (16) 岩波書店刊『邦訳 日葡辞書』による。

- (17) 「山賤」の項の註文に「山人」とみえるが、もちろん仙

人の意ではない。以下に『節用集』諸本の状況を示す。見出し語はA「山賤」、B「山賤」と、傍訓三拍目の清濁によつて二つに分かれる。註文によつて分類して示す。「A

又山人」(正宗文庫本)・「A^山山人之世話^{ノ義也}」(大谷本)・「B^{山人}山人之義也」(増刊下学集)・「B」(亀田本)・「A^{山人}山人之義也」(伊京集)・「B^{山人}山人」(岡田希雄本)・「A」(堺本 饅頭屋本初印・通行)・「B^{山人}山人」(黒本本)・「A^{山人}山人」(和漢通用集・圖書寮零本・天正十七年本)・「A^{山人}山人」(永禄二年本・経亮本・枳園本)・「B^{山人}山人」(堯空本)・「B^{山人}山人」(南葵文庫本)

- (18) 大阪俳文学研究会編『藻塩草』本文篇(無刊記古活字覆刻整版本によった)。

- (19) ゆまに書房刊『連歌資料集』三所収影印本によった。(なお、この影印本はとり合わせ本である。)

- (20) たとえば『日葡辞書』においてp.註記(Poesia 詩歌語)のある語は五二七語あるとされる(『邦訳 日葡辞書』解題〔十三頁〕が、詩語と考えられる字音語を除くと歌語註記のある語は四四五語前後になる。この歌語註記のある語の約半数は法楽連歌にみられる。『日葡辞書』の詩歌語と連歌の関わりについては別稿を予定している。)

- (21) 法楽連歌には次の様な擬字造語がみられる。⑦「いと竹」(↑糸竹)下19名オ五・下57ニウ十二 ①「ををもひの家」(↑火宅)上26ニウ十 ②「彼岸」(↑彼岸)上42ニウ七 ⑤「かものかね」(↑鼈鐘)上133名ウ六 ④「桑門」(↑桑門)下26三オ三・下198ニウ三・下199名オ七 ⑥「九のしな」(↑九品)下41ニウ二 ⑧「こまろのましら」(↑心猿)下13ニウ三 ⑨「法の門」(↑法門)上76初ウ十 ⑩「筆の海」(↑筆海)上81ニウ三 ⑪「わしの山」(↑鷲山)上183ニウ十一 ⑫「かものかね」は比較的確な用例と思わ

れるが、全体としては和歌における使用とちかい。ただし④「桑門」については「よすてびと」なる訓も考えられる。

『節用集』諸本では⑧「ヨステビト」と附訓するものに、正宗文庫本・大谷大学本・岡田希雄本・和漢通用集（よすてびと・永禄二年本・村井本・両足院本・枳園本・天正十七年本）があり、⑨「ヨステビト」と附訓するものに、増刊下学集・伊京集・堺本・黒本本・堯空本・南葵文庫本（「僧」にも附訓）がある。（尚、亀田本は無訓、饅頭屋本（初印・通行とも）は不載。）また『連歩色葉集』も「桑門」に対して「ヨステビト」（静嘉堂文庫本）・「ヨステヒト」（天正十七年本）をあげ、『温故知新書』も「サウモンノヨステヒト」を附訓。これから考えて「桑門」↑「よすてひと」の結びつきがみられたことはあきらかであるが、「くわのかど」の可能性ももちろんあるので掘字造語に含めた。

(22) 『連歌貴重文献集成』第六集所収、書陵部蔵本に拠った。

(23) 『天理 善本叢書 58 和歌 古註續集』によった。

(24) たとえば、④「神代の秋の／とこやミハいさ 紅葉する名も／桜はの宮ふりて」上43三ウ五の、「桜はの宮」については通行の国語辞書はてがかりを与えないが、『匠材集』には、「桜宮」の条下に、「さくらの宮也／北野にてへさくら／葉の宮と云也」とある。

(25) 『匠材集』については近藤尚子の手になるマイクロコンピュター用索引作製プログラムによって見出し語索引を作製し、それを利用した。

(26) 『節用集』について山田忠雄氏は次の様に述べる。『集約的である といふことは、編輯の方針が、日常語の総ばな、的蒐集・網羅主義に あったのではなく、おのづから問題語主義である ことを 意味する ものであらう。』（山田忠雄『節用集天正十八年本類の研究』一頁東洋

文庫刊、昭和四十九年）

(27) 『連歌貴重文献集成』第八集 所収、蓬左文庫本によった。

(28) 『天理 善本叢書 20 新撰菟玖波集 実隆本』

(29) 育徳財団発行『前田本まぐらの草子』によった。

(30) 『たまきはる（健御前の記）総索引』（鈴木一彦、鈴木雅子共編明治書院刊）によった。